千輪の華 津村節子

新潮社

千輪の華

津村節子

新潮社

千輪の華

昭和六十年五月十日印刷
昭和六十年五月十五日発行

著者　津村節子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三(二六六)五一一一
編集〇三(二六六)五四一一　振替東京四―八〇八
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

定価一二〇〇円

© Setsuko Tsumura 1985　Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-314706-7 C0093

千輪の華

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

一

まだ、日暮には間があった。

二人は、国定公園になっている海岸線をドライブしながら、目的の場所に向う予定であった。

雪深い盆地を過ぎて峠を越え、たてこんだ家並の間を通りぬけると、正面にコンクリートの堤防が横たわっていた。その向うに海が見える。

いつの間にか雪が少なくなっていて、道路には殆ど積っていない。

山裾に細長くへばりついている小さな漁村の、ほんの一並びほどの家の間に車をもみ入れて行くと、間もなく家並がとぎれた。

海岸沿いの道は、断崖が海までせり出している部分をトンネルが貫通し、快適なドライブウエイになっている。

途中に小さな温泉場があり、海岸道路の頭上の岩壁にあいている大きな洞窟には、海中から上った中国の唐時代の十一面観音がまつられているという。

海は、遠くへゆくほど色を深め、墨をまぜたような濃い藍色を呈していて、低く垂れ籠めた鉛色の空と一つになっている。

運転手は、命じもしないのに車を停めた。切り立つ断崖や荒々しい岩礁に、怒濤が激突して舞い上り、しぶきが白い泡状になって岩に散り、波間に漂っている。

「あれが、波の花です」

運転手が、二人連れの客に説明した。

若い男と女の旅は新婚旅行とも見えるだろうが、それにしては二人とも黙りがちなのを、訝しく思っているかもしれない。

熔岩のように海になだれ込んだ岩が、長い年月の風化作用で洞門になっている名所まで来ると、又運転手が車を停めた。

その周辺の急斜面には、野生の水仙の群落がひろがっていた。

「ちょうどいい時に来なはった。暮から一月にかけては蕾のうちからみな切って出荷してしまうんで、水仙を見に来たお客さんはがっかりしなはるんですわ」

運転手は観光案内に一役買った口調で説明する。

「野生ですで花は小さいんですけど、匂いはいいんですよ。ちょっと降りてみなはったらどうです」

運転手は、あまり感動も示さぬ客に、不服そうである。
「そうね、降りてみる？」
祥子は、愛想のいい運転手が煩わしく思えたが、俊彦をうながして車を降りた。あまり変った印象を与えても、という気持が無意識に働いていた。
寒風の中に咲いている水仙は、花も小さく色も薄いが、高い香りが軀を包み込んでくる。暫くそこに佇んでいると、花の香りに酔いそうだった。
「カメラを持ってなはるでしょう。お二人で並んだとこを写しましょうか」
「カメラなんか、持っていないよ」
俊彦が、にべもない口調で言った。
「惜しいことをしましたね。水仙が盛りやのに。シーズンはずれに来て、がっかりしなはる人が多いんですよ」
写真を写しておいてもよかったかな、と祥子は一瞬思った。これまで二人は一緒に遠出をしたことはなく、写真を写したこともなかったのだ。
やがて、柱状節理の断崖が、目もくらむ高さにそそり立っている北陸随一の名勝地に着いた。その沖には、丹塗りの橋を架け渡したこんもりとした小島が浮んでいる。
「東尋坊って、自殺の名所なんですって？」
祥子は、岩の上を恐る恐るハイヒールで踏みながら断崖の突端まで行き、腹這うように両手をついて身を乗り出してみた。淵の色は深い藍色で、数十メートルの高さにいる祥子に、波の飛沫が雨のように降りかかる。
「昔ここらは、店も宿もなあもない淋しいとこで、死ぬのにはよかったかもしらんけど、こんなにぎょうさん人が来るようになっては、死ぬ気にもなれんでしょう」
自慢の景勝地を自殺の名所と言われて、運転手は不服そうだった。
「ほれに、実際はここからのぞくと足が竦んでしもて、なかなか飛び降りられんそうですよ。かえって、あっこに見える島から飛び込んだり、この先の松林で首をくくったりするもんが多いと聞いています」
要するに、やはりこのあたりは、自殺者が多いということなのだ。
予約した宿は、海際のやや高みに建てられていた。
一階は風よけのまがきが立て廻されていたが、案内された部屋は二階で、広縁から海が一望に見渡せる。もっともこの宿は、どの部屋からも海が見えるように設計されているのかもしれない。
「こんな場所に建っていて、津波なんかの心配はないんですか」
広縁に立って暗い荒海を見下しながら、お茶を淹れている女中に問うと、

「へえ、津波の話は聞いたことはありませんけど、二階のこの部屋まで高波をかぶったことがあります」
と、こともなげに言う。
「畳も襖も潮をかぶってしもて、全部取り換えたんですよ。大損害でしたわ」
「そんなこと、度々あるの？」
「二階までということは滅多にないでしょうけど、下の部屋が水浸しになるのは珍しいことでもありません。ほんでもお客さんは海の傍を好まれますでね。特に夏場は海に近ければ近いほど喜びなはるんです」
この海岸線は、海水浴に適した浜が多いので夏は人出が多いが、冬季は近くに著名な芦原温泉があるため、海辺の宿に泊るのは、蟹や身のしまった日本海の魚を食べるのが目的の客ぐらいだという。この宿も幸い混んではいないようであった。
部屋には浴室がついていないので、俊彦は女中の案内で共同浴場へ行った。
祥子も浴衣に着替えて、先刻部屋に案内されるときおよその見当をつけておいた婦人風呂へ行った。
盗まれるような物は持っていないし、部屋を空けておいても盗難の心配はなさそうな宿である。
婦人風呂は多分男湯よりも狭いのだろうが、海に面した部分が天井までガラス張りで、広々とした感じである。入浴客は祥子の他にいない。
彼女は、肩までかかるゆるくウエーブした髪をピンであげ、そろそろと湯舟に身を沈めた。冷えた皮膚に湯が沁みて痛いほどだったがすぐに軀が馴れて、寒さに強張っていた手脚を思い切り伸ばした。色白のすんなりした脚が透いて見える。
新幹線に特急を乗り継いで来れば、福井まで五時間足らずだが、湘南や千葉の海しか知らない祥子は、ずいぶん遠い処へ来ているような気がする。俊彦は北陸へ来るのを渋っていたが、祥子はどうしてもここでなければならない、と思い決めていたのだった。
湯気で忽ち曇るガラス窓を、時々掌で拭ってみる。外は暮れ切って、水平線もさだかではない。白い牙をむき出して荒れ狂っていた波も見えず、ただ波音だけがとどろいていた。あまりに海に近いので、波がガラスを破って浴室にはいって来そうな気がする。
先刻車を走らせて来た折、堤防を越えてくる波のしぶきが車体にかかるほどだった。ここでは、人が波にさらわれることもある、と運転手が言っていたが、自殺者は東尋坊から飛び込むまでもなく、どこでも簡単に死ねそうな海である。
湯から上って部屋へ戻ると、食事の用意が出来ていた。湯上りのビールの一ばいは、細胞に浸みわたるようだった。

女中は二人に一ぱいずつ酌をすると、
「よろしくお願い致します」
と、祥子に言い置いて出て行った。
「凄い波音だな」
俊彦が、海を見つめながら言った。窓を開けると、波音は一層高くなった。
テーブルの上には、鰤と鯛と甘えびの造り、赤い殻から花が咲いたようにはじけ出ている蟹のあらい、赤子のこぶしほどもある大きなばい貝、茹でたずわい蟹の雌も一ぱいずつついている。
熱燗の酒が、食道を通ってゆくのがわかる。湯上りなので酔いも早く廻り、頬が熱く火照ってきた。
「おいしいわよ。新鮮だから」
祥子は、しっかりした歯ごたえの、とろりと甘い甘えびを舌にのせながら言った。俊彦はあまり箸をつけず、あおるように酒ばかり飲んでいる。
俊彦は、祥子が屈託もなさそうにテーブルの上の料理を片端から食べるさまを、奇異なものを見るように見ている。
「この蟹は雌だわね。甲羅の中のものがとってもおいしいわ。つぶつぶのものは卵ね。オレンジ色のチーズみたいなものは何かしら」
「よく食うな」
「だって、せっかくここまで来たんじゃない。心残りのないように、食べておきたいわ」
女中が食器をさげて、床をのべて行った。
「ぼくたちのこと、どう思っているだろうね」
俊彦は二つ並べて敷かれた床へ眼をやって言った。
「どうって？」
「夫婦とは思わないだろう」
「そうかしら。じゃ、世をしのぶ愛人同士？」
「きみ、きみはいまも本気でやる気でいるのか」
祥子は、驚いて俊彦の顔を見つめた。
「冗談でこんなところまで来ないわ」
いまさら何を言い出すのか、と祥子は語調が強くなった。
「いや、あまり暢気そうだから」
「私、気持の整理がついてよかったと思っているのよ。久しぶりに晴れ晴れしたわ。ここへ来るまでどんなところかと思っていたけれど、とても気に入ったのよ」
祥子はそう言いながら、ひょっとして迷いが出ているのは俊彦ではないか、と思った。
旅の間中、かれは殆ど口をきかなかった。もっとも旅の目的が目的だから当然だと思っていたが、ここまで来て、本気かと聞かれるとは思わなかった。
面倒臭いから、死んでしまおうか、と言い出したのは、俊彦のほうなのだ。祥子は、死ぬつもりなら、何でも出来る、とかれの言葉にとり合わなかった。

今どき、親の押しつける縁談を断わり切れずに悩むほうがおかしい。二人は入籍こそしていなかったが、もう夫婦同様に暮すようになって一年半にもなるのだ。

俊彦と知り合ったのは、かれがまだ大学四年生、祥子はかれより二つ年上の二十三歳の春だった。

祥子は、服飾関係の短期大学を卒業後、原宿のヤング向けのブティックに勤めていたが、店が終ってから時々同僚たちと行くディスコで、俊彦たちのグループと隣り合わせたテーブルに坐ったのがきっかけである。

俊彦は、大学の同級生らしい男女六人で来ていた。男四人、女二人で、ディスコで踊るのに男女がペアを組む必要はないのだが、ちょうど祥子は先輩の珠美（たまみ）と二人だったのが、双方を接近させることになった。

祥子たちはかれらのテーブルに誘われ、あきらかに親密そうな二組からはずれがちの俊彦、竜一と、何となく親しくなった。

俊彦は地方から出て来て、東京で勉強する学生のために建てられた男子寮にはいっているということだったが、それまで女友達がいなかったのは、男子寮にいるからではなく、女に接近するすべも度胸もないからだろうと思われた。

初めのうち、俊彦らのグループに祥子と珠美が加わるという形で、時々ディスコで踊ったり、ドライブに誘われたりして親しみを加えていったのだが、あとで知ったところによると、珠美は初めてかれらと会った次の日に、もう竜一とホテルに行っていたのだった。

何となく珠美は竜一、祥子は俊彦というように組合わせが出来て、しかし俊彦は女に馴れていないせいか、単独で祥子を誘い出すことはなかなかしなかった。

祥子は、珠美と竜一が急速に親しくなってゆくのを見ながら、自分は俊彦に気に入られていないのではないか、と思ったものである。

職場はほとんど女性ばかりで男は三十三歳の店長のほか二人、客は全部女ばかりという環境にいて、男性と知り合う機会は乏しかった。俊彦は生れ育ちも悪くなさそうな感じで、かれらの学校も、私立では名が通っていたから、祥子にとって俊彦はなかなか得難い相手と言えた。

店員たちが交替でとる夏休みを、祥子と珠美は一緒にとり、俊彦たちのグループの一人が持っている房総の別荘に行った。夏の間の仮の住いだから、リビングをかねた広いダイニングキッチンと、泊る人数の融通がきく和室が二間あるきりの家で、男と女は二室にわかれて四人ずつ雑魚寝（ざこね）したのだが、祥子が夜中に目を覚ますと、傍らに俊彦が坐っていた。かなり前から寝顔をのぞき込んでいたらしい。

熟睡していて気がつかなかったが、いつの間にか、みなどこかへ行って、部屋にはかれと二人だけが取り残されて

いた。
祥子は軀を硬くして、そのままの姿勢でいた。俊彦が、おずおず顔を近づけてきた。
祥子は、初めて男と唇を合わせて、何の感動も抱いていない自分に驚いていた。ただ、眼をつむったまま、棒のように横たわっていた。
俊彦のほうは、急に高ぶってきて、祥子の軀の上に覆いかぶさり、小さな顔を両手でしっかりはさみ込むと、激しく唇を押しつけた。
祥子は息が詰って、男の重い軀を下から支え上げようとした。が、パジャマのボタンがはずれてあらわになった胸を吸われた途端、覚えのない戦慄が軀を貫き、思わず小さな叫び声をあげた。
祥子は、自分の思いがけぬ感覚に狼狽して、俊彦から逃れようとした。自分がどうなるかわからぬ不安を感じていた。
俊彦はぎごちなかったが、初めてのことではなさそうだった。祥子の反応に自信を得たのか、遮二無二抱きすくめてくる。
「待って、ちょっと、待って、お願い」
祥子はあえぎながら哀願した。気の転倒している俊彦には、それを聞き入れる余裕はなかった。
「誰かが、見ているわ。ここではいやよ」
咄嗟に口に出たのだが、本当に誰かが見ているような気がした。
俊彦が怯んだ隙に、祥子ははね起きた。俊彦は薄闇の中で周囲に眼を配ったが、
「誰もいないよ。気のせいだ」
と、再び祥子を抱き寄せた。
「ここではいや。いつ誰がはいってくるかわからないわ」
「じゃ、外へ出よう。きっとみんなも外へ出て行ったんだ」
俊彦は祥子の手をつかんでうながした。
ここではいや、と言ったのは急場を逃れるためで、祥子は俊彦と結ばれる決心はついていなかった。かれはまだ、愛情を告白する言葉も口にしていなかったし、まして、結婚する気でいるのかどうかもわからない。
祥子のことを、珠美は遅れている、と笑うが、会ったその次の日に男とホテルに行く珠美にはついていけない。珠美は自宅から通勤しているのに、どう親を言いくるめるのか、よく外泊しているらしい。
祥子の家は、母の死後一周忌を済ませると間もなく父が母の従妹と再婚し、若い義母が幼い子供を二人連れて一緒に暮すようになった。
母は、若くして未亡人になった従妹を気にかけていて、何かと面倒をみていた。自分が死んだら、雪子と結婚して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

やって下さい。雪子なら、私はやきもちを妬かないわ、などと冗談のように言っていた。
が、あまりに早い再婚に、祥子は、もしかしたら父は、母の生前から雪子と親しかったのではないか、という疑念を抱いた。
祥子は、就職を機に家を出てアパート暮しをするようになったのだが、一人暮しの娘はだらしがない、と言われたくない気持が、常に彼女の行動を規制していた。
男とつきあうなら、結婚を前提としてつきあいたい。二十三歳なら、結婚は早すぎる年ではない。
父も、祥子が結婚すると言えば、肩の荷がおりるに違いない。
俊彦は、祥子を強引に引っぱるように家を出て、海岸のほうではなく、裏の松林の中へ伴って行った。
こぼれ松葉の散り敷く砂地は、まだ昼の太陽のぬくもりが残っていた。祥子は、俊彦と少し離れて腰をおろした。俊彦が身を寄せてくると、祥子は用心深く近づいた間隔だけ離れた。
「ぼくが嫌いなの」
「あなたは私のことを、どう思っているの?」
「どうって、きまっているじゃないか」
俊彦は、呆れたように叫んだ。
「どうきまっているの。私、まだあなたの気持、何も聞いていないわ」
「好きだよ。好きだからこうしてきみを」
俊彦はけものが飛びかかるように祥子を押し倒した。
俊彦と結ばれた時、祥子は結婚を誓わせたわけではない。だが、やがて二人は同棲するようになった。
俊彦は家から仕送りを受けていたが、それは学費と寮費がせいいっぱいで、小遣いはアルバイトで補っていた。
祥子も、働いているとはいうものの、物価高の東京でアパートの自炊生活は楽ではなかったから、いっそ同棲してしまえば万事安上りになる、と俊彦が言い出したのだ。
祥子は、これまでよりもいくらか広い六畳の和室に四畳ほどのダイニングキッチンのついたアパートに移り、俊彦は寮を出て一緒に住むようになった。結婚届こそ出していないが、夫婦同様の生活だった。
アパートの権利金や、新しく購入した家財道具も、祥子のささやかな貯金をはたいて払い、家賃や生活費も、大半は祥子が出していた。寮を出て浮いた寮費だけ俊彦は祥子に渡したが、寮費は安くて俊彦の食費程度にしかならなかった。
俊彦は大学を卒業して就職してから、ようやくこれまでよりも多目に家計へ入れるようになったが、親許へも送金しているようだった。二人の生活の大半は祥子が担ってい

るのに、自分の親に仕送りする俊彦に、祥子は釈然としないものを感じていたが、金銭のことは口にしにくかった。
俊彦が卒業するまでは、入籍のことも待つつもりであったが、就職して半年経ってもかれははっきりした返事をしない。
俊彦の親たちは、二人が同棲していることを知っているのだろうか。祥子が二人の生活を支えていることを、知っているのだろうか。知っていて黙っているのなら、祥子を利用していることになる。
俊彦の母は、美容院を経営しているという話だが、店が忙しいのと、脳溢血で倒れた半身不随の父を置いて出られぬ事情のため、これまで一度も息子の様子を見に上京したことはない。
「いつまでも、こんな中途半端の状態じゃ、子供も産めないわ」
祥子が言うと、俊彦はぎょっとした顔で、
「子供なんて、そんな。生活して行けないよ」
と言った。
「子供はもう少し先でいいけれど、とにかくあなたのお父さんやお母さんに会わせて欲しいのよ。結婚式なんて挙げなくていいから、籍だけ入れておきたいわ」
「ああ、それは考えている。だけど新入社員だから、なかなか休みはとれないんだ。正月休みに二人で田舎へ行こう。それまで待ってくれ」
俊彦はそう言い逃れたが、少し前から俊彦に縁談が起っていて、両親は話を進めようとしていたのである。
相手は、郷里の大きな料亭の一人娘で、俊彦とは中学校の同級生だった。母から送られて来た写真と家族書きを、祥子は見てしまったのだ。
その娘は、少々白痴的な感じはするが、目鼻立ちのはっきりした美貌であった。豊かな家の養子にはいり、こんな美しい娘を妻に出来るという話に、俊彦は心を動かされているのではないか、と祥子は不安を覚えた。
夕食のテーブルの上に、祥子は娘の写真を載せておいた。
「人の引出しを、勝手にあけたりして」
俊彦は顔をゆがめた。
「夫婦なのに、こんな隠しごとをするほうがひどいわ。私に見せないっていうのは、気が動いているからでしょう」
「馬鹿な。見せる必要もないと思ったからだ」
「ずいぶんきれいな人ね」
「きれいと言ってもな。こういう顔はぼくの好みじゃない」
「でも、大きな料亭の娘さんなんでしょう?」
「養子なんてごめんだよ。冗談じゃない。それに水商売なんて、やっていかれないよ」
俊彦は吐き捨てるように言った。だが、温和しくてあた

りの柔らかな俊彦は、案外養子向きかもしれない、と祥子は思う。
縁談の間に立つ男は町の有力者で、俊彦の母が美容院を出す時に少なからず世話になったので、両親も無下にことわることが出来ないのだ、と俊彦は言う。女手で商売をやっている母親にとって、おそらく今後もその男の力を必要とすることは多く、おろそかに出来ぬ相手だろうし、町でも屈指の資産家と俊彦との縁組は、魅力であろう。
やがて矢のように帰省をうながす手紙や電報が来るようになった。俊彦は、とにかく一度帰って自分たちのことを話し、縁談をことわってくる、と正月休みに田舎に帰った。
祥子は、俊彦を一人で帰すのは心もとなくて、一緒について行くと言ったのだが、かえって話がこじれるから、といつになく俊彦は強硬に祥子の願いを退けた。
帰省の折の様子は、俊彦が話さないからわからないが、周囲から強引な説得を受けたに違いない。そうした状況の中で、祥子とのことをどの程度話し得たか、彼女は不安だった。
ちょうどそんな折、祥子は軀の変調を感じ、それを確かめるために産婦人科医を訪れた。俊彦は、祥子の妊娠を恐れて用心深く接していたが、祥子は生理日を偽っていたので、心あたりは充分にあった。
診察の結果、妊娠四カ月にはいったところと聞き、祥子はこれで俊彦の気持も定まるだろう、と思ったのだが、それを告げられたかれは、狼狽のあまり顔色を変えた。
「なんだって？　そんな筈はない。嘘だろう」
「嘘だなんて、あんまりだわ。どうしてそんな顔をするの？　喜んでくれていいことよ」
「しかし、まだこんな状態で子供なんて。無茶だ」
祥子は、俊彦の狼狽の激しさに、打ちのめされた。妊娠がはっきりした以上、俊彦も肚を決めて両親に結婚の話をしに行ってくれるだろう、と思っていたのは、甘過ぎたようだった。
「四カ月なら、まだ何とかなるんじゃないか」
「それ、どういう意味？」
祥子は逆上して叫んだ。
「まずいよ、それはまずいよ。話をしにくくなってしまう」
「話は、もうしてくれたんじゃないの？　いったいどの程度話してくれたのよ。でも、これでお母さんたちも、思いきりがつくんじゃない？」
しかし、郷里ではかれの帰省を機に、縁談は急速に進められていたのだった。母親から来た手紙を無断で開封すると、結納を交わさねばならないから、週末に飛行機で帰って来いという内容だった。
「あなた、私のことなど何一つ話さなかったのね。結納で

すって？　あなたが承知しないのに結納なんて話になるわけないじゃないの？　いったい、どういうつもりよ」
「ぼくは承諾なんかしていない」
「はっきり承諾しなかったとしても、絶対いやだ、とも言えなかったんでしょう。あなたの態度があいまいだから、こういうことにまで進んでしまったのよ」
祥子は、いまさらながら俊彦の優柔不断な性格に腹が煮えかえる思いだった。
会社の帰宅が遅い日は、郷里へそのまま行ってしまったのではないか、という不安にさいなまれ、夜更けたアパートの外へ出て、何時間も待っていたりした。
出張と言う言葉も信じられず、疑心暗鬼の苦しさに会社へ電話をかけ、かれの上司や同僚に事実を確かめずにはいられない。妊娠中は気が高ぶり易いと聞いているが、祥子は異常な自分の興奮を抑制出来かねた。
「会社へみっともない電話をかけるなよ。恥をかくじゃないか」
俊彦は困り果てた様子で言う。
「だって、本当に出張かどうかわからないんですもの」
「そんなにぼくが信じられないのか」
「信じられないわ。信じたいけれど、信じられない。信じさせてよ。ねえ、信じられるようにしてよ」
こんな精神状態が続けば、おなかの子供にいい影響はあるまい、と祥子は暗澹(あんたん)とする。
「あなた、私を出しぬいて一人で帰るなんてしないでしょうね。もし一人で帰ったら、留守中に私何をするか、わからないわよ」
祥子は、睡眠薬を買って持っていた。本当に何をするか、自信がなかった。

二月の末近くなって、俊彦の母親から、速達が届いた。
再々帰郷をうながしても帰って来ないので、さすがに異常を感じて心配になったのだろう。

今週の土曜日に上京します。美保さんも東京の親戚に行くというので、一緒です。
おまえに東京案内を頼みたいと言っていなさるから、そのつもりで予定をたてておいて下さい。結婚準備の買物もあるようです。
美保さんは、親戚の家に一週間ほど滞在するそうですが、私は一晩おまえのアパートに泊って、邪魔にならぬようすぐ帰ります。

いよいよぬきさしならぬ羽目に陥った俊彦は、その手紙を祥子の方に投げて寄越すと、仰向きに倒れるように寝ころんだ。

「ちょうどいいわ。相手の人も来るというのなら、話は一度に片づくじゃないの。私、お医者さまから妊娠の証明書を貰って来て、お母さんとその人に話をつけるわ」
俊彦は黙りこくったまま、天井を見つめている。
「ねえ、あなたも今度という今度は、肚を決めてよ。いつまでもいい加減なことを言っていては先方にも失礼だし、まわり中に迷惑をかけるんですからね」
俊彦は何を考えているのだろう。祥子の言葉が聞えているかどうかわからない。
「あなた、なぜ黙っているの？　あなたは私とこうなったことを後悔しているの？　結婚する気なんかなかったのね。独りで生活するのは不便だから、結婚相手が現われるまで重宝がって利用していたってわけ？」
祥子は、俊彦の枕許に坐って、肩を強くゆすぶった。
「そんな。自分をおとしめるようなことを言うのはよせ」
「だって、そうとしか考えられないわ。一時逃ればかり言っていて、いよいよお母さんたちが出て来ることになっても、対決する決心がつかないんじゃないの」
言いながら、祥子はこんな頼りない男をどうして好きになってしまったのか、と情けなくなって、涙がこみ上げてきた。
いっそ、子供を堕(おろ)して別れてしまったほうがいいのではないか、という思いが胸をかすめる。
俊彦は起き上ると、両手で顔を覆って幼い子のようにしゃくり上げている祥子の肩に手をかけ、
「悪かった。ぼくが悪かった。いろいろきみにつらい思いをさせて」
と言った。
久しぶりにやさしい言葉を聞くと、祥子はこれまでの悲しみが一挙に堰(せき)を切って、俊彦の膝(ひざ)の上に大声をあげて泣き伏した。
「おふくろは、寝たきりの親父を抱えて苦労のし続けで、ぼくを大学に行かせる余裕なんかなかったのに、ずいぶん無理して頑張ってくれたんだよ。だからおふくろに押しまくられると、きみのことを言い出すチャンスがなくなってしまったんだ」
俊彦は、困惑に顔をゆがめて深い溜息(ためいき)をついた。
「面倒臭いから死んでしまおうか」
唐突に、俊彦が言った。
「何を言っているの。真剣に考えてよ」
祥子は、心にもないことを口にする俊彦を冷ややかに見た。だが、俊彦を自分一人のものとするには、心中するのが一番なのかもしれない。
親たちも身勝手だが、俊彦も信じ切れない。気が弱くて親孝行なかれは、結局親に引きずられてしまいそうだった。息子の縁談を、自分たちの義理や都合で取り決め、推し進

めようとしている親の鼻を明かしてやりたい気もする。
祥子の妊娠は、俊彦にショックを与えたようだが、妊娠さえしていなかったら、祥子と別れることが出来ると思っていたのだろうか。別れて、何ごとも無かったように、料亭の婿養子におさまるつもりでいたのだろうか。
俊彦がはっきりした態度を示さなかったからこそ、縁談はここまで進展してきたわけで、かれはクラスメイトだったという美しい美保に少なからず惹かれているのではないかと思うと、胸が抉られるように痛む。何も知らない美保にも、自分の存在を知らせてやりたい。
俊彦が、子を身籠った愛人と心中したと知ったら、親たちも美保や美保の家族たちもどんなに驚くだろう。
俊彦に対する苛立たしさや、かれの両親に対する腹立ち、美保に対する嫉妬が祥子の頭を熱くし心をかき乱す。
いったん死ぬことを考え始めると、そのことばかり考え、それしか自分の気持がおさまる方法はないように思えてくる。
俊彦は、板ばさみになった苦しまぎれに、心中などと口走ったのかもしれない、と思いながらも、それならなおのこと心中しよう、と祥子は俊彦の気持を確かめたいという思いに憑かれた。
行き先は、以前から憧れていた荒海の打ち寄せる北陸の海辺の小さな宿。自殺するのにもふさわしいところらしい、と想像し、祥子は俊彦の気の変らぬうちに宿を予約し、切符を買った。
母親と美保が郷里を発った同じ日の朝、二人は遺書も残さずアパートを出た。
俊彦の決心は、ついていたかどうかわからない。かれは、自分から言い出した手前、祥子を阻止することが出来なかったのか。祥子が母親と美保を待ち受けて対決する修羅場を見るよりも、とにかくアパートを逃れ出たほうがまだしも穏便だ、と考えたのか――。
いずれにせよ、彼女らが上京して管理人に聞けば、俊彦が女と同棲していることは明らかになるし、合鍵を借りて一歩部屋にはいれば、事実を証明する家財道具が置き並べられていて、二人の生活の匂いが部屋中に浸みついている筈である。俊彦は母親に気を兼ねて何も言い得なかったが、最もショッキングな形で自分の生活を示す結果になるのだった。

初めて俊彦と結ばれたのも、波の音が聞える松林の中であった。
今も、雨戸をゆする風の音にまじって、激しい波の音が聞えている。
床の中には湯たんぽが入れてあったが、ガスストーブは寝る時に必ず消してくれ、と言われたので、部屋の温度は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo